

平成29年3月16日(木)

老球の細道313号

逃げれば逃げただけのことか

会津バスケットボール協会 室井 富仁

現役教員の頃の話である。ある運動部の生徒達が地区大会決勝を控えていたせいか体育授業の水泳を見学した。理由は「体調不良」と「水着忘れしました」だった。長年の経験から「決勝は負けだな!」と直感した。案の定、久しぶりに勝ち進んだ決勝戦はとんでもない大差で負けてしまった。

部活で練習している時の姿は元気よく、挨拶も大きな声で、動作もきびきびしていて好感の持てる生徒達なのだが、決勝戦を控えたせいなのか、あたりまえにやらなくてはいけないことができなくなってしまっていた。運動部でもないごく普通の生徒達がほとんど休まずに意気揚々と参加しているのに、運動を専門にしている者が水泳の授業くらいで??

勤務した学校の色々な運動部の生徒達は、大会を前にすると体育の授業を見学したり、マラソン大会などの学校行事を手抜きしたりすることがあった。放課後の練習のために体力を温存したり、試合を前にしてケガを怖れるためであろう。要するに、戦う前に自分自身の気持ちに負け、弱気になってしまっているのである。当然試合は負ける、必ず負ける。勝つか負けるかわからないハードな戦いは技術、体力の勝負ではなく人間力の勝負になる。戦う前から弱気になったり、過度に体調など気にしすぎるようなナイーブなハートではタフな戦いで勝てるはずがないからである。

私が高校生の頃、新人戦、選抜大会、高体連(インターハイ)の3つの県大会の決勝戦を同じチームにすべて僅差で負けてしまったことがあった。実力がなかったといえばそれまでだが、3回も同じような負け方をしたのには必ず何か理由があった。そのことに気づいたのは教員になってからであった。必ずやらなければならないことから逃げていた。

高校時代、今思い返せば弱気であった。土曜日の4校時に柔道の授業があった。担当の先生が若くてバリバリの柔道専門家であったために非常に厳しい授業だった。準備運動、補強運動、約束練習、乱取りと当時高校生だった私には、とてもハードで痛い授業だった。だから手抜きをして放課後の練習のために体力を温存していた。柔道の授業後の部活動練習は腕の筋肉がパンパンでシュートには悪影響だった。しかし、なぜその時、柔道の授業がバスケットボールのコンタクトプレーに役立つこと、補強運動の腕立て伏せが筋力トレーニングに効果的であることに気づかなかったのか。柔道の授業もバスケットのトレーニングとすれば一石二鳥だった。今思い返すと非常に残念である。

部活動に青春をかけてる生徒がたくさんいる。このような生徒達の中に部活動の時と授業の時の姿がまるで違っていることがある。部活動では元気よく声を出して一生懸命練習する。顧問の先生にも必要以上の挨拶をして礼儀作法もすばらしい。と思いきや、授業では突然仮面ライダー「へんしーん!」となってしまう。練習の疲れのせいか居眠りへっちゃら、授業の課題提出はいつも×、クラスの清掃はさぼる。部活動にかこつけて嫌なことからすぐ逃げる。勝利の源「平常心」は「24時間、私は私である」から生まれるのに。

部活動におけるトップアスリートの戦いは熾烈でタフなものである。最終的には人間力の戦いになる。普通の生徒がやること(授業をきちんと受ける、課題を出す等)をできなくて、イヤなことからすぐ逃げる弱気な人間に、そんな戦いの場は不釣り合いである。